

三人と戦艦

ムラサキ
カネ

光が沈んでいく。

ただ真っ暗な夢の底へ光が吸い寄せられ、そこには闇しか残らない。

夢は真っ暗から始まる。

落ち着いた中を静かに待っている。

自分はただ寝ているんだと暗示をかけているのに、暗闇を歩くうちに忘れてしまう。

早朝。まだ、日の出ない時間。深夜と言えなくもない。吐く息は白いが、季節はよく分からなかった。

特急に乗るために、とある地方都市のターミナル駅前に1人の高校生が少ない荷物で現れた。彼の赤紫の髪が軽くなびいた。

栗栄東高校に通う男子、風間唯人。今日は、ある意味同志ともいえる仲間とはじめてのキャンプに向かうのだった。

ほどなく、髪の長い少女が現れた。よく見ると、大きな荷物を持たされた少年が続いている。SAYURIと森野浩平。

出身も素性も、お互いよく知らない3人だったが、何か似た匂いを感じ、仲間だと意識している。

「お待たせ！」重そうなリュックを背負った浩平が第一声をあげる。

「はい、しっかり持つ。早いね、唯人」SAYURIは手ぶらで近づいてきた。

「俺もなんか持とうか？」唯人は浩平の荷物を指差した。

「お構いなく」

「これ、罰ゲームなんだよ」

「じゃあ、しょうがないかあ」

「うわ、諦めるの早っ」

なんだかんだ言いながら、唯人はある程度の荷を受け持った。

目的地は深い山村だった。

電車の中で夜明けを迎えた三人は、少し眠気を帯びながら、予定地へ向かった。駅からバスで1時間。さらに歩いて1時間という、おおよそ観光には向かない土地だった。三人とも体力がありすぎるのか、その道のりにあまり不服を言わなかった。ちなみにこの段取りを組んだのはS A Y U R Iである。

名前もよくわからない村だったが、現地の人々は親切だった。彼らは2泊程度の客人に家一軒を貸してくれた。

若い人のキャンプといえ、家事ができないというトラブルがよくあるが、なんとそんな困難には至らなかった。

ボーイスカウトのごとく、3人の自炊の手際は一級の腕だったのだ。それもそうだろう。さすがそれぞれに冒険をしているだけのことはある。

「そういやさ。唯人、シャツに名札ついてない？」

浩平が皿を片付けながら言った。唯人が自分のシャツをよく確かめる。

「ああ。親父がサ。知らない所に行くなら便利だゾって」

「そうかもな。名前なんてなかなか覚えてもらえないもなあ」

「あんたはキャラクターが薄いの」SAYURIは浩平によく突っ込む。

「なあんだよそれ」

「充分、俺とかぶってると思うけど」唯人は自分が浩平と似ていると自分では思っている。

「唯人は髪が赤いでしょ」SAYURIは二人が似ているとは思っていないらしい。

「また、見た目だよ」浩平が漏らす。

夜はすぐに訪れた。

街の灯かりがない分。星がよく見えた。深夜、唯人が屋根の上で涼んでいた。誰にも邪魔されない。

今ごろ、あとの二人はお互いを気にしながら、寝付けずに朝までどぎまぎしているんだろう。と勝手に想像した。大概のことは器用なのに、二人ともそういうことには不器用だったからである。

物音がした。

「唯人。唯人」

声をひそめて浩平が登ってきた。よく見ると、防毒マスクを持ってきている。

無理やりマスクをはめられつつ、浩平の注意がどこにあるのかを尋ねた。

「あれだよ」

目を凝らし見渡すと、森林の土や、水路に沿ったり、低いところを薄紫色のガスが這っている。

「薄紫色...か？」

「ああ。ムラサキだ」

「やばいの？」

「たぶんな。明日は忙しくなるからその装備で寝てねってさ」

「お気遣いありがとうございますだな」

「よし、寝るぞ」屋根を降りる二人の少年はさながら特殊部隊のようだった。

防毒マスクをつけて眠る少年たち。

紫色の夜は更けていった。

翌朝、村の人々の異変に気づいた。
3人以外はおよそ正常とは思えなかった。

虚ろな目でこちらを見ている。生気のない顔。
近づくと恐いので、遠くから話しかけてみる。だが、住民は興味深そうにゆっくり近づいてくるだけである。特に何をしてくるわけではないが、近づくのは不気味である。

しかし、あっという間に3人は全ての村人に囲まれていた。

「あっち行けって」

浩平がずっとわめいているが一向に事態は好転しない。暴力に訴える手段もあるにはあるが、危害を加えてこない以上、避けるぐらいしかできなかった。

我慢できずに唯人もついに漏らした。

「あー、もう、どいてって」

次の瞬間を、3人は予想していなかった。

不思議なことに唯人の周辺だけは、村人がどよどよと離れたのである。

「ずりい、なんで？」

「さあ？」

「唯人とりあえずこっちも、どかして」

SAYURIの合図で、3人は村人達の群れから離れた。

遠くからみると全員なんとなく、顔に紫色を帯びている。

「追いかけて来ないでね。ね」

唯人が言い聞かせながら、3人は村をあとにした。

山道を歩きながらSAYURIが仮説を立てた。

昨夜の薄紫色のガスをすうと、紫色の顔になり、人間の機能が低下する。知能が特に低下し、ガスを吸っていない者に群がる。何故か唯人の言う事は聞く。というものだった。

「髪が赤紫だからかな？」浩平の意見である。

多少、意見を出し合ったが、さして新発見はなかった。さきほどの気持ち悪さを語り合いながら、3人は港を発見した。

山間から港を発見したが、不用意に近づかないようにした。港なら人は多い。3人の注意力は観察に費やされた。すでにただのキャンプではなく、彼らのそれぞれの日常に近づいていた。

だが、3人はお互いにその姿を見せたことはまだなかった。

「あれは！？」浩平が唸った。

あとの二人が浩平の観察ポイントへ駆け寄った。双眼鏡を覗き込むと、港の埠頭がよく見えた

。

列になっている人々と...戦艦！

人々はやはり顔色が悪く、どうやら軍服の人間に誘導されている。べつに髪が赤いわけではない。3人はレンズ越しに目を凝らした。

「そうか！」SAYURIは叫んだ。

「声でかっ」浩平がつぶやく。

「あー、うるさい。今、大事なとこなんだよ！」SAYURIは浩平を叱った。

「で。答えは？」唯人は痴話げんかにならないうちに割り込んだ。浩平はちょっぴり照れている

。

「それよ」SAYURIは唯人の胸を指差した。

唯人の胸には、名札が付けられていた。

ようやく納得がいった。あの薄紫のガスは知性を奪う悪魔のガスである。人の顔の分別もつかないほどに脳機能が低下した結果、ガスを吸っていない人間に興味を示し、それ以上に名札のある人間に服従する。

結論から言えば、どこかの国か組織が人々を奴隷化しようとしていたのだ。昨夜のガスはその準備といえる。

その悪意に、卑怯さに、唯人は腹が立った。

浩平も怒っていたが、それ以上に、唯人の変化に興味を示した。

SAYURIも心配そうな顔をしていた。

唯人の心は怒りでいっぱいになった。





怒りに震えた唯人の顔が紅潮していく。徐々に首筋や腕も紅くなっていく。腹のあたりで何か光ったかと思うと、額の毛の生え際から牙のようなものがメキメキと音を立てて生えてくる。角だ。

唯人は瞬間的な光に包まれた。光の落ち着いた後には2メートルほどの巨人が立っていた。

しなやかで十分に膨らんだ筋肉をもつ、例えるなら・・・赤鬼というしかなかった。

「唯人！」 浩平が声をあげる。

「これが、唯人？」

SAYURIは初めて見るその変異に興味を示した。

『すまねえ。サポート頼む』

赤鬼、唯人はいつもよりはるかに低い声と、よく響く高音を同時に放った。

「いいよ。攻撃位置をナビゲートする」

SAYURIはあっさりと言に順応した。

「んじゃあ、俺はドア全部開けてくるわ」

浩平は、当然と言った顔で引き受けた。

浩平はなんとなくうれしかった。このメンバーで作戦が展開できるとは夢のようだ。

特殊工作員、森野浩平。彼は様々な時空で生きていた。

旅行者、SAYURI。時間と空間を偵察する発明者。

赤紫の髪、風間唯人。赤鬼に変化するヒーロー。

浩平にとっての、お楽しみの時間がやってきた。

SAYURIは赤鬼と浩平にサングラスのようなバイザーをさっと投げた。受け取りざま、装着する浩平。サイズ合わせのため赤鬼のほうが一秒ほど時間がかかった。SAYURIも同様のバイザーを着けている。

「目標！戦艦の占拠」

SAYURIはマイクを通して指示を出した。

その直後、浩平と赤鬼はすでに飛び出していた。

低空を飛び、数百の兵を翻弄する赤鬼。混乱にまぎれ、あっという間に艦に張り付く浩平。

「で、最適ルートは？」

浩平は船内に潜入した。

赤鬼は埠頭の兵を海に突き落としている。

「浩平。そのまま地下へ。扉を全て開けたら司令室へ！赤鬼はデッキ上を確保！」

SAYURIの声が届く。

赤鬼は船の上から乱射されるマシンガンをはじきながら、一人ずつ放り投げていった。

「ウヘラー」「ンノフーーー」兵達の言語は全くどこのモノか分からなかった。こっそりとSAYURIだけが意味ありげににやりとした。

浩平と赤鬼が走っている。

時間はかからなかった。

占拠された船にSAYURIは赴いた。赤鬼の腕には提督とおぼしき人物が捕らえられてる。カバンからSAYURIはとっておきの道具を出した。水筒のようにも見える。そして、聞いたこともない言葉で提督に尋問を始めた。

浩平にはなんとなく予想がついた。とんでもなくあぶないモノで脅しているのだ。

「じゃあ、残念賞」

交渉は決裂したらしい。SAYURIは水筒？のボタンを押した。

「ヌビラハ...！！」

提督の顔に紫色のガスが吹きつけられる。

「あ、ムラサキ」浩平が苦笑した。

なんて恐ろしいんだSAYURI。

『昨夜の？』

赤鬼は徐々に唯人に戻っていく。

「ちょっとお返し」

SAYURIは水筒をしまった。

「これで、連中はうちの管轄下！？」

浩平は付け足した。

SAYURIの尋問で、全国三十箇所と同様の事件が起こっていると判明した。

三人は相談した。

「たまには3人もいいじゃん」

唯人が言った。

「あ、俺が言おうと思ったのに」

浩平は唯人の腰をくすぐる。仲良くくすぐり合っているふたりをSAYURIは微笑ましく見ている。

3人で全国を回ろう。分担することもできるが、たまには3人で行こう。

「それにはまずは休養」

SAYURIの発言で、戦艦に泊まることにした。

夜中、何人かの兵が船に登ろうとしたが、紫の顔をした提督が1人ずつ、ムラサキを吹き付けて、味方になっていった。うまくいけば半月くらいで、この国は元の状況に戻ることになる。

3人なら大丈夫だろう。

3人は安心して、深い眠りについた。

また、光が沈んでいく。

※この物語はフィクションです。実在の人物・団体等とは関係ありません。

「紅い宝石」シリーズ

短編小説「ムラサキ」第1話より改訂

MURASAKI

原作 毬宇斎 悟達「紅い宝石」

構成 毬宇斎 我津

画 娛誠粒 真一

"Murasaki" Blue&Red (C)MoridomeShingo2002,2011

(C)ALGI Products1997-2001

著作権管理 アルジプロダクツ

盛留真悟作品

※毬宇斎悟達、毬宇斎我津、娛誠粒真一は全て盛留真悟のペンネームです。それらの工房の総称をパップU. C. Zといいます。また、著作権管理にかかる個人事業の屋号をアルジプロダクツとしています。よって紅い宝石シリーズとムラサキのすべての著作権ならびに隣接する権利は盛留真悟が有することになります。

2011年2月3日 盛留真悟

